

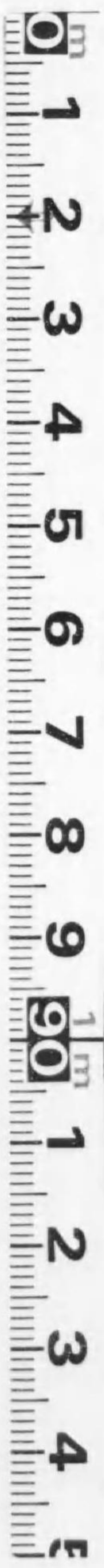
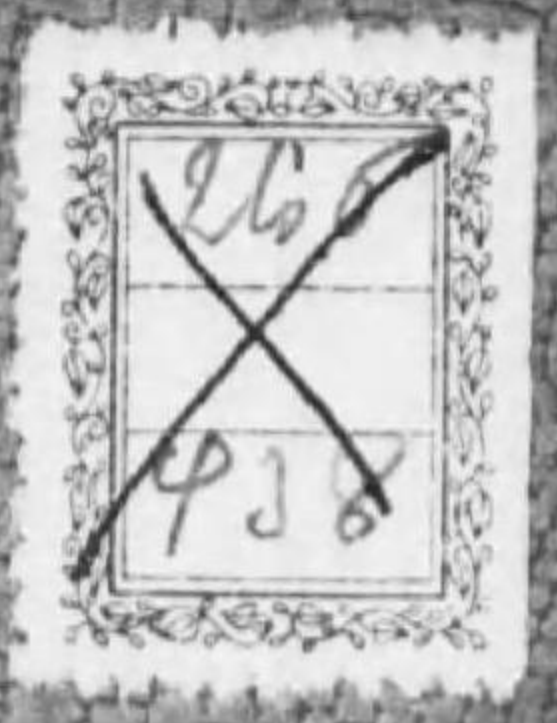
持113

8841

曲等

子墨梅

全



始



47113
884

山田流家元

千里梅

山田檢校斗養一勝善作

第二十卷及琴歌洋解

千里梅

琴 雲井
三弦 三下り

山田檢校斗養一勝善作
第二十卷及琴歌洋解

常経とこにとは。ツレふかせてくがな。いへ

のかせ。世よをへてあふぐふみのみ

合ひろきめぐみをおもふその

ろづくしや。ちさとままで。にほひ

おこせ。うめの花はな。合あ心をそむる

正
大 3.11.10
内交

47113
884

山田流家元

千里梅

山田檢校斗養一勝善作

第二十卷及琴歌洋解

千里梅

琴 雲井
三弦 三下リ

山田檢校斗養一勝善作
第二十卷及琴歌洋解

シテ 常経とこに。ツレ ぶかせてくがな。いへ

のかせ。世よをへてあふぐふみのみ

合ひろもさめぐみをおもふその

ろづくこや。ちさとままで。にほひ

おこせ。うめの花はな。合ごころ心をそむる

正
大 3.11.16
内交

ひとえんだを。たゞそのまゝの手向たむけ
にて。かをりもかみのまにまにと。
ゆくての袖そでもにほふまで。思おもひを
はこぶおとひ河かは。水みづのそこひも
あかみどり。むすぶてにふく春風はるかぜ
は。けふきさらぎのかんあざに。

よるのつづみのすみほる。樂六ヲ一
律上ル
しんによの月つきもところがり。和光わくわうの
かげもらさぎよし。ちりもやはら
ぐおんとくは。六一律
下ルよよへてたえじ
よものたみ。したひまつれわかる
かやの。関せきもる人ひともあらばこそ。

ミカみのなさはけはふかきよのツヤ
みにもくろきこうめがか。合シテそもこ
のはなはばんぼくに。さきがけし
てかばかりの。かたちいろかの花^{はな}を
ければ。おのづから。御神^{おんかみ}もめで
させたまひ。花^{はな}もまた。心^{こころ}ありけり。

とびかよひ。あるじ合あすれぬ
いさをしを。しる人^{ひと}ぞくする。こと
のはの。しげきはやくにとりそ
へて。きみがシテ千^ちとせをまもるあ
る。きみが千^ちとせをまもるたのる。
うめのにほひやあめにみつらむ。

千さとの梅

千さとの梅とは千里の梅なり、これは天神様が
讒者の為に斥けられ、筑紫へ流され給ひし時に
兼て、梅を愛せられしかば、

「東風吹かは匂ひ起せよ梅の花主じなしとて春をわすれ
と詠まれしか、後一夜の内に梅の木は筑紫まで飛び行
きしといふ、之れを飛び梅と云ひ、京都より筑紫ま
では遠ければ、千里の梅と云ひしなり、其時櫻もあ
りしが、櫻には何の言葉もたのかりしとて枯れしといふ、
順朝臣の歌に、

「梅は飛び櫻はかれぬ菅原も深くぞたのむ神のちかひを」
とあるは此事なり。

とことにはに、ふかせてしがたよ、いへのかせ、
とことにはに、は常久と書き、いつ迄経つても愛らぬ久しき
と云ふ事なり、ふかせてしがたよ、は吹かせ度きものなり
となり、いへのかせは家風、家の勢にて、何時迄も家を
繁昌させたしとなり菅原公の歌に、

「久方の月の桂も折るはかり家の風をも吹かせてしがたよ」
世をへてあふぐふみのみち、ひろきめぐみをおもふその、
世をへてあふぐふみのみち、世を経て、は年月を経て

からも仰ぐ學問の道を云ふ、ひろきめぐみをおもふその
は廣き惠は思ふ園にて、學問の惠と、菅公の廣き惠と
をいひ係けたるなり。

こゝろつくしや、ちさとまで、にほひおこせし、うめの花、

こゝろつくしや、は心盡しからにやなり、心盡しと竹
紫と云ひ係けたるなり、ちさとまで、は千里迄、にて
筑紫の千里もある處迄となり、にほひおこせし、うめ
の花、は匂ひを起した梅の花にて飛梅なり、これは菅公
の歌に、

「東風ふがは匂ひ起せよ梅の花主じあしとて春なわすれそ」

とあるより取りたるにて、初めに註す、菅公の廣き惠を
おもふて、匂ひ起したる梅と續くななり。

心をそむる、ひとえだを、たゞそのまゝの手向にて、

心をそむる、ひとえだを、は心を深める、心にかけて一枝を
なり、たゞそのまゝの、は直ちに其儘の、手向にて、は御供
としてなり。

あまのみかみの、まにくくと、ゆくての袖もかほるまで、思ひを
はこぶ

あまのみかみの、は天満神、にて天神様の事を天満
自在以徳天神と稱へ天満宮ともいふまにくとは

心に任せて心のまゝににて、神の御心のまゝにて、神の御心のまゝに任せて御供としてと御心のまゝに匂ふと下にかゝるなり菅公の歌に、

「此度はぬさも取りあはず手向山もみぢの錦神のまに」とあるをとりたるなり。

ゆくての袖もかほるまで、思ひをはこぶ、おもひ河、ゆくての袖も、は行く手の袖もにて、行くさきの袖もなり、ゆくて、を手と見て袖と續けたるなり、かほるまで、は香るまでにて梅の香に染みて袖の香るまでなり、思ひをはこぶ、は心を運ぶ思ひを遣るなり、おもひ河

は思ひ川なり、筑摩にある逢ひ初め川の事にて、思ひ初め川ともいふ、観音寺と天満宮との流を流る、昔の歌にも

「筑紫なるおもひ深川わたりなば水おまさらむよどむ時なく水のそこるも、ふかみどり、むすぶてにふく春風は、けふきさ

らぎのかんわぎに、よるのつづみの、すみのぼる、水のそこるも、は水の底井もたより、ふかみどり、は濃き緑にて、水の積りて緑色なるをいふ、底井と云ふより底深きと續づけしなり、むすぶてにふく、春風は、は両手にて水を掬ふをむすぶといふ、掬ふ手に吹く春風にてこれ昔の歌にも

「袖ひぢてむすびし水の氷れるを春立つ今日の風や解くらん
などありて両手で水を掬ふた水の上を春風の吹くと
いひ春といひて二月につづくたより、けふきさくらぎのかん
わざには誠に二月の神事にもあり之れは二月十五日は
菜種の御供として天神様の御祭にて鼓などを打てば下
に鼓といふたより、よるのつづみの、すみのほる、夜の鼓の音
の澄むたより、澄み昇ると云ひて次ぎのすみのほる月と
係るなり。

しんによの月も、ところがり、わくいうのかげに、かたしきの、
花のまくらに、ゆめむすぶ、

しんによの月も、は真如の月にて、之れは佛教に
いふ事にて竹いかだの處に註す、天神様は佛教
の信仰も深かりし方なり、ところから、は場所柄
とて、くわいうのかげに、は和光の影にて和光の光
を隠すなり、天神様は才學勝れ給ひながら、世に
光をかくして配所へ赴き給ひし事にいひ係けて
月影の隠れたる影になり、かたしきの、は片敷にて
一人寝をいふ、花のまくらにゆめむすぶ、は花を枕
とて寝る事なり。

えに、はしらぬ、みち、はの、つゆとみだれんか

るかやの、関せきもる人ひとも、こころせよ、かみもなさせは、
ふかきよのおみにもこころをさうめが、

えにいはしらぬ、は縁えんは知らぬなり、花はなの手て
枕まくらに結むすびたる縁えんとつづくたより、みちしはの、つゆと
みだれん、は道みち芝しばに置おく露つゆと乱みだれるなり、かるかやの
関せきもる人ひともこころせよ、は刈かり萱かやの関せきを守もる人ひとも氣き
を付つけよとあり刈かり萱かやの関せきは筑つくし紫しの大だい宰さい府ふの南なん門もんの處ところ
にて、昔むかし齊せい明めい天てん皇わう行あん宮ぐうを建たてさせられ、関せきを刈かり萱かやの
里さとに置おかれし處ところなり、刈かり萱かや道どう心しんも此この處ところの人ひとなりし
なり、昔むかしの歌うたにも

「かるかやの関せき守もりにのみ見みえつるは人ひとも許ゆるさぬみちなりけり
かみもなさせは、ふかきよの、は神かみ様さまも惠めぐみは深ふかき、
世よのにて、神かみにいひかけて深ふかき情なさけを結むすびし夜よ、深しん
夜やといふ意いもあり、やみにもこころをさうめが、は関せきに
も知しれる梅うめの香かにて梅うめは香か高たかく関せき夜よにても香かを以もつて
知しれるといふにて昔むかしの歌うたに

「春はるの夜よの関せきはあやなしく梅うめの花はな色いろこそ見みえぬ香かはかくる
などあり。

そもこの花はなは、ばんぼくにさきがけして、かばかりの、かたち
いろかの、花はななければ、おのづから、御み神かみもめでさせたまひ、

そもこの花は、は抑も此梅の花はなり、はんぼくに
さきかけして、は萬木に魁して即ち初春諸花に先
立ちて咲くをいふ、かばかりのは是れ程のかたちいろか
花なければ、は姿といひ香といひ比敵する花が無き故
おのづから御神もめでさせたまひ、は自然と天神様も
御愛しになり。

花もまた心ありけり、とびかよひあるじわすれぬ、いさほ
しを、しる人ぞしる、ことのはの、しげきはやしに、とり
そへて、歳みがちとせを、まもるなるく、うめのにほひ
や、あめにみつらむ。

花もまた、心ありけり、は花の方でも又心ありてなり、
とびかよひ、は飛び通ひ行きてなり、飛梅の事をいふ
初めに註す、あるじわすれぬ、いさほしを、は主人を
忘れぬ花の功をにて歌に、

「東風ふかは匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘れそ
とありまじを忘れず花の飛び行きしををなり、しる人
ぞしる、は知つて呉れる人が知るとにて昔の歌に

「君ならで誰れにか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞしる
とあるより取りたるなり、ことのはのしげきはやしに
言葉の繁き、林にて言葉の葉を木の葉に寄せて

260
428

著作
所權
有作

大正三年十一月十二日印刷
大正三年十一月十六日發行

東京市東區梅区桶町十三番地
著作及
發行兼
印刷者

重元勝善

木の葉は繁きものなれば、繁きに續けたるたより、
とりそへて、は取り添へてたより、學問の道に取し添へ
て、君みがちとせをまもるなるく、は君の長久
の壽を守る處の、うめのにほひや、あめにみつらむ
は梅の香か天に満つたならんにて、天神様を天満
宮と云ふより天にみつといひしなり、

終

